「幸せの花」は咲かなかった

—三作分裂以後の歩みと教訓—　②

元三作分会　川口　貞安・田中　弘

前号では、分裂後のたたかい、和解協定の成立、協定後のたたかいなどにふれ、「道理ある主張と不当性の追及によって二十二人に対する不利益取り扱いが徐々に是正された……」と述べました。

新たな差別

しかし、月給制の採用（三十九年七月）、資格制度の導入（四十年六月）は、新たな差別攻撃の手段に使われました。

勤続年数、熟練度からみても六級職、七級職が当然であるにもかかわらず、全員八級職に格付けされ、十年、十五年後輩者が六級職、七級職に格付けされたのです。

資格の差は賃金展開、一時金配分に大きな差をもたらします。新たな差別とのたたかいが展開されていきました。三作組合員ですら、その不当性を認めていたのです。

私たちは決意を新たにし、あらゆる機会をとらえて職場、人事課窓口での交渉を積みあげていきました。この差別についても、長期間はかかりましたが、是正の方向に変えさせていきました。

六十年三月の合理化

三作の会社側は経営不振から脱却するため、九百九十人から六百三十人体制への人員削減をうち出しました。

削減方法は、県内外への出向、希望退職、就職斡旋の名による首切りなどでした。

分裂して新たに発足した三作労組（職組と合同済み）は、「企業安定」が優先するとして、全面協力の態度でしたので、これを拒否することは解雇につながるものでした。

三池労組在籍の三人のうち二人が「三池産機」へ出向（賃金その他取り扱いは同等）、一人は異動なしで、現状の身分を守ることができました。これは、三池労組指導部のねばり強い交渉と階級的立場が貫かれたからだと思います。

三作労組の歴史的教訓

分裂による新労結成大会で発表された綱領には「極左、極右の労働組合支配を排除し……真の民主的労働組合運動推進のためにたたかう」とあります。

また、機関紙『さんさく』十四号には「労使融合した安定」が「……労働者の幸せの花が咲く」ことを「期待する」と述べています。

実態はどうでしょうか。「幸せの花」は咲いていません。「幸せ」どころか四十年余の勤続労働者（五十四歳）の本給は十九万五千円余で時間外手当を含めた総額で二十九万五千円余（六十二年十月分）です。

昨年末の一時金支給額は三十二万八千円余でした。労働省の賃金基本調査（五十九年六月）によると五十歳から五十四歳の平均月収は大企業三十五万七千円。中企業二十九万八千円余となっていますから、まさに中企業並み以下です。

合理化についてはさきに述べたように情け容赦はないのです。

三作労組が分裂の当初に掲げた民主的労働組合運動は、まさに『連合』の掲げる方針と同一のものといわざるを得ません。

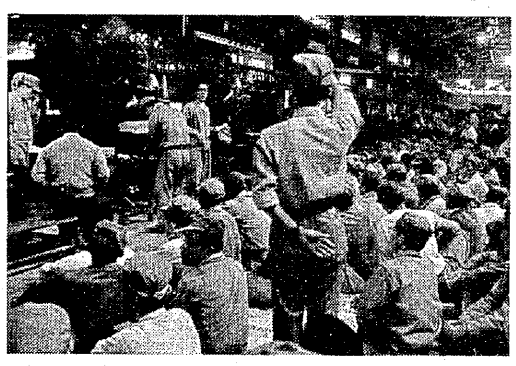
（一九八八年三月二十三日）

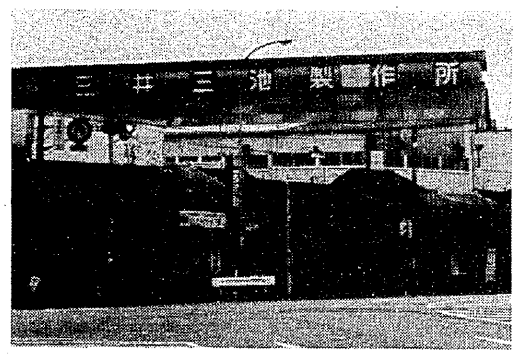
×　×

森川義弘さんの定年退職を最後に、分裂いらい二十二人の三池労組員は皆無となりました。

前々号から、三池製作所支部での〝分裂〟とその後のたたかい、そしてごく概略的な歴史と教訓についてふれてきました。三池労組員としてきびしいたたかいでしたが、この間の思い出を、それぞれの皆さんから寄せていただければ幸いです。

三池労組三作支部の旗


分離・分裂のための職場集会で



跡地が話題になる現在の三作

職場の声

「企業あって労働者なし」

首切りは絶対認められない—

第一鉱の港沖区域（旧四山鉱）の採炭中止が、予定されていた九月末から六月末に早まった。

予想されていたことではあるが、やはり現場の労働者に与えたショックは大きい。

「五月には人員整理が出るげな」「二十五歳以下と五十二歳以上は解雇するげな」など、もっともらしい噂がささやかれている。

会社は「合理化ではなく〝生き残り〟のための縮小」だとして、昨年四月と六月に旧四山鉱から旧三川鉱へ配転を強行し、高職種から低職種に替えられた人が多数出た。

さらに、昨年十月には第一鉱（旧三川鉱）、第二鉱（旧有明鉱）と名称を変えた。

今年の一月には坑口統合が強行され、坑外職場を一本化した。この時から四山鉱の閉山だといわずにきたが、今回も旧四山区域の採掘が終わっても閉山とはいわない。

閉山合理化を、ただの統合・縮小なのだといいくるめ、なしくずしに徐々に合理化を進めてきた。

これに対して新労組は「企業存続のため」だといって、すべての合理化を認め、今また人員整理まで「協力する」のだろうか。企業の生き残りのために、労働条件の切り下げも、賃上げも、期末手当も、そして首切りまでも会社のいいなりでは、そこには企業だけがあって労働者の存在はないのではないだろうか。

いま、国内では石炭の需要が増えているのに、少しばかり海外炭が安い、貿易摩擦の解消のためにやむを得ないといって国内炭を切り捨てているが、海外炭を輸入しているのは大商社や大企業で、さらに大々的な開発にまで乗り出している。三井の場合も同じだ。

私たちは、今までに出された合理化や、これから出されようとしている合理化の仕組みをしっかりと見定めて、首切りなど絶対認めさせないように力を集めて頑張ろうではないか。

（三分会・田中教幸）

すでに動きの止まった旧四山鉱やぐら

石炭つぶしの犯人はだれだ

パート1

いま三池炭鉱では、人減らしをはじめとする大がかりな合理化攻撃がかけられようとしています。

すでに、職員に対しては「田川セメント」などへの片道キップの出向・配転が強制的に始まっており、現場では不安と怒りが大きく広がっています。

これに対して新労組の幹部は、合理化を先取りして「三池炭鉱が生き残るために」といって、組合員に「自分が首を切られることに協力しなければならない」と、会社の幹部でも言えないような大変なことを平然と言っています。

「もう炭鉱は先がない」「国が決めた政策だから閉山や合理化に反対してもどうしようもない」など、あきらめムードもたしかにありますが、いま合理化を黙って許したり協力したりすれば、千人以上の炭鉱労働者の首が切られて失業の巷に放り出され、残った労働者には低賃金、無権利、労働強化など、まさに「去るも地獄、残るも地獄」の道が待っているのです。

（三分会職場新聞『やま』第十四号、四月十日付から）

宝の持ちぐされ

第一鉱の繰込場には、最近はやりの大画面テレビがデンと据わっているが、いつもカバーがかかりっぱなしで、ほこりをかぶったまま眠っている。

ある人いわく「あれは会社の対外PR用だい」。現場では、合理化をめぐっての暗い話ばかり。せめて繰込前の短い時間、テレビのニュースぐらい放映しても悪くはない。（職場新聞『やま』から）

読書

『わが魂はネルソンとともに』

南アフリカ。日本に、あまり馴じみのない国のようだが、実は、貿易輸出入でアメリカを抜いて一位になろうとしている。

欧米各国が、アパルトヘイト非難を強めて資本の引き揚げや貿易縮小の方向にある時、「名誉白人」と言われ稼ぎまくっているのである。

——外国の企業がなかったら、今日のような政治状況はなかった。多国籍企業は、この国の政治的犯罪者です——ウィニー・マンデラ。

全身、全霊を傾注して、同胞の解放と民主的で自由なアフリカの実現めざして頑強に妥協なくたたかうネルソン・マンデラ。

終身刑のネルソンとひき裂かれ、はげしい人種差別と迫害の中で、たたかい成長するウィニー。

黒人最初のソーシャルワーカーであり、黒人の母といわれる、ウィニー・マンデラ婦人の結婚を、人生を、苛酷なまでのたたかいをインタビューと手紙をもとに、生き生きと伝える感動の書である。

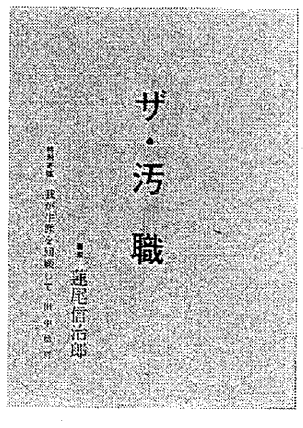
是非、一読をおすすめします。

新日本出版社刊・千五百円

（七分会・平川道治）

汚職追放を訴え蓮尾さん

『ザ・汚職』を発刊

元三池労組員で、長い間大牟田市の市会議員をつとめた蓮尾信次郎さんが、このほど汚職の再発防止の願いを込めて『ザ・汚職』を出版されました。

『ザ・汚職』はB5判九十八ページで、①ザ・汚職、②汚職追放と自治体労働者の闘い、③特別寄稿「わが生涯を回顧して」田中稔男、④国労と共に前進を、の構成で、自らの経験にもとづいて汚職根絶の対策を示しています。この本は領価五百円。組合にあります。